まいど、パン屋でーす

「まいどー、パン屋でーす」
玄関の戸を開けると、笑顔の女の娘がパンの入った袋を持って立っています。
「今日は、胡桃と無花果のライ麦パンとグリッシーニです」
「わぁー美味しそう、この前のピスタチオのパンもとっても美味しかったわよ、今日も楽しみー」
これは、幼い頃に誰しもが一度は夢見るであろう職業、例えば、男の子だったら電車の運転手さんとか消防士さん、女の子ならばお花屋さんにケーキ屋さんと言ったところでしょうか、そんな自分でも覚えていない頃の夢を実現させた、普通の女の娘のお話です。
沢山の困難を乗り越えて夢を叶えたサクセスストーリーでもなければ、多くの人々の涙を誘うような感動悲話でもありません。
けれども、きっと最後にはくすっと笑って、へぇー面白い娘が居るものだな、
「フランスパンが食べたくなった」と仰ることでしょう、きっと……
菊川洋子は九州の中心に位置する県の中心都市の更に中心部に近い住宅街に、サラリーマンの父親と専業主婦の母親の元、二男一女の末っ子として生まれました。
幼い頃から、いえ、きっとお母さんのお腹の中にいる頃から食へのこだわりＤＮＡは育まれていたのでしょう。まだよくお喋りも出来ないのに絵本より料理の本を眺めるのが好きな子供でした。
母親が毎晩、眠りに就くまでの間読み聞かせてくれた童話も、食べ物が出てくる場面になると異

常なまでに関心を示すのでした。
黙っておとなしく聞いているのでそろそろ眠りに就いてくれるのかな、と思っているところに、
「そこでくまさんは蜂蜜をぺろり……」
とでも読もうものなら、しまったと思う間もなく突然はしゃぎだして、
「まんま、ねえ、まんま」と興奮して目をきらきら輝かせ、眠るどころではなくなります。
仕方なくまたもう一話、それでも駄目でまたもう一話読む、そのうちに母親の方が眠くなってしまい寝てしまった、ということも一度や二度のことではありませんでした。
おまけに食欲も旺盛ときていました。
年子のお兄ちゃん二人がようやく手を引かずに歩けるようになって、洋子を乳母車に乗せ、毎日お散歩に出掛けるようになった頃のことです。
散歩に行くのは良いのですが、家に帰るなり、
「まんま、まんま」と食べ物を要求するのです。
食事もさせ、おやつも食べさせた後でのお散歩ですから、お腹が空いてる筈はないと、暫く放っておいてみたところ、それはもう火が点いたと言うのはこういうことかと思わせるくらいに泣き叫ぶ有様で、一度泣き始めたら
「洋子ちゃん、ちょっと待ってね、ご飯、すぐ作ってあげるからね、ほらお兄ちゃん達はおりこう

さんよー、洋子ちゃんもお利口さんよねぇ」
どんなに宥めてもすかしても効き目はなく、それはもう即刻要求を満たしてやる事しか泣き止ませる手立てはありませんでした。
お兄ちゃん達がせがむのなら理解もできるのですが、洋子というのが首をかしげるところで、とにかく洋子の中では決まりごとになっているとしか思えず、お散歩から帰ると、何かを口にしなければ納まりがつかないと言ったところだったのでしょう。
何をさておいても洋子に何かしら食べさせる。それが散歩から帰ってからの母親の一仕事になっていました。
そんなある日のこと、お散歩から帰った洋子がいつものように、
「まんま、まんま」
と言い始めましたが、まだ残っていると思っていた林檎がなくなっているではありませんか、食べさせるものが何もありません。どうしたものかと思っている間にも洋子の声はだんだん大きくなっていきます。
泣き出す前に何とかしなければと思うのですが、ない物はどうしようもありません。一度泣きはじめたら暫くは泣き止まない洋子ですから、負ぶってでも料理をして早めの夕食にするしかないだろうと抱きかかえた時です、ふと料理の本が目に止まりました。

咄嗟にその料理の本を開いて、
「ほら、美味しそうね、すぐに作ってあげるからね」と言ったのでした。
するとどうでしょう、ピタリと泣き止んでニコニコとご機嫌になったではありませんか、もうこの機を逃してはならないとばかりに洋子を本の前に座らせると急いで台所に立って料理を始めました。いつ泣き叫びはじめるか、気にかかりながらの料理です。
急いで、急いで、静かなうちに……と。
それでもやはり、どうしてもいつもと違う様子の洋子が気になって振り返ってみると、何と、本を破いて口にくわえてもぐもぐさせているではありませんか、それも満足そうに笑っています。
真っ青になって洋子の元へ飛んで行った母親は、口の中から雑誌の切れ端を取り出し、引き剥がすように本を取り上げたのですが、洋子の胃の中に収まった写真の料理もあったようです。
そしてまたもうちょっと大きくなって、這い這いが出来るようになり、少しも目が離せなくなった頃の事です。
駄菓子屋を営んでいたおばあちゃんの家には商売柄、ねずみ除けに使う”猫いらず”という言いえて妙な名前の殺虫剤が納戸の隅などに置いてありました。大人から見ると、そのピンクとも赤ともつかない如何にも毒々しい色に胸が悪くなるような気もするのですが洋子にはお菓子にでも見えたのでしょうか、そしてまた美味しそうに映ったのでしょう、掴んで口に運んだのでした。その

瞬間を、正に本当にこれは偶然と言うか、いや必然と言うべきなのでしょう。　姿の見えない洋子を探していた母親が目にとめたのでした。これまた大急ぎで口に手を差し込んで吐き出させ、大事には至らなかったと言います。

そして、好きな物はどれだけでも食べたいという欲求が強いのか、それとも子供なので加減が出来ないのか、はたまた満腹感が解らないとでも言うのでしょうか。周りが心配するほどの食欲で、美味しい美味しいと言って食べていた物を「ご馳走様」の前に戻してしまう。そんな事もしょっちゅうでした。

その上、熱を出したりお腹をこわしたりして自分だけ食べられない物があったりするのがよほど口惜しいことのようで、きちんと言えもしない言葉で、

「ケーチ(ケーキ)は？　ぶろう(ぶどう)は？」といつまでもしつこく、食べられるまで言い続けたそうです。

そう言った本人も知らない数々のエピソードを持つ、幼い頃から食欲も好奇心も周囲が驚くほど旺盛な女の娘でありました。

物心ついてからも益々食への関心は高まるばかりで、小学校へ上がる前くらいですから四、五歳でしょうか、この頃の事は本人も断片的にではあるけれど微かに覚えているようで、母親やお兄ち

やん達に、ああだったこうだったと言われると確かにそうだったと思いだせるのでした。

それにこの頃は、食べる事は言うまでもないことですが、作る方にも関心が芽生えてきたと見え、料理をする母親の傍らに立ち、

「洋ちゃんもお料理するの」と言っては包丁を使おうとしたり、火にかかったお鍋をかき回そうとしたり、怒るに怒れない母親をハラハラさせながら、お手伝いと言うよりは邪魔をしていたようです。

そしてこの頃の最大の関心事は何と言っても母親に連れられて行く、今で言うデパ地下でした。中でもいつも必ず飛んでいく場所がありました。

当時はどこのデパートの地下でも見かけたように思うその機械は、カステラのような生地にデパートのマーク等を焼印した一口サイズの饅頭が流れ作業で出来あがっていくという優れものです。洋子はデパートへ着くや否やその機械のある場所へとわき目もふらず母の手を引っ張っていくのでした。

大人も楽しいと思うのですから子供にとっては、それはそれは興味のつきない機械であります。誰しも一度は立ち止まって眺めた経験があると思うのですが、洋子は人一倍その機械に惹かれたようでした。

今では考えられないことですが、機械の前を離れようとしない洋子に困り果てている母親を見か

ねた店員の方が、
「大丈夫ですよお子さんは見てますから、お買い物をしていらして下さい」と言ってくださり、母親が買い物をする間ずっと、飽きもせず饅頭の出来上がっていく課程を眺めていたのでした。
そして買い物を済ませた母親に、その饅頭を買ってもらい、喜んで帰って行く、という何とも長閑な良い時代でありました。
魚屋の前で魚をさばく姿に見とれ、巻き寿司をまく寿司職人さんの前に立ち止まり、母親に手を引かれながら歩くデパートの地下は洋子にとって遊園地より楽しい場所だったかもしれません。
ところがデパートの地下にもまして洋子の興味を引き、どうしても動こうとしない店が家の近所にできてしまったのです。
それはパン屋さんでした。
スーパーマーケットの一角に当時としては珍しく、ウィンドウからパンを作る工程を見ることができるようになっていました。
焼きたてのパンの香りがスーパーの店内にまで溢れ、パンを買うつもりなどなかった人までもが、ついつい香りに誘われて行列に並ぶほどでした。
そんな店を洋子が見逃す筈はなく、ここでもまた、ウィンドウのガラスに貼りつくようにしてパン作りを眺めているのでした。

饅頭の機械の場合は月に一度も行くか行かないかのようなデパートでのことで、同じ事の繰り返しでしたので、ある程度のところで言い聞かせると素直にその場を離れることが出来たのですが、パン屋さんはそうはいきませんでした。
ほぼ毎日のように出掛けるスーパーでしたし、パン作りの工程はパンの種類でも多いに違ってきます。特に成型の段階などはいつまで見ていても見飽きることがなかったようです。
ここでもまた、母親はウィンドウの前から離れない洋子を置いて買い物を済ませ、パンを買って家へ帰るという習慣が出来上がってしまいました。しかし、連れて帰るのは饅頭の機械の前とは違い、至難の業でした。
一週間も過ぎた頃にはもう、洋子の方が店の人気者になってしまったようで、販売の女性達に、
「あっ、洋子ちゃんいらっしゃい」
「いらっしゃい、今日は少し遅かったのね」などと声をかけられるようになっていました。
「ご迷惑をかけていませんか」
申し訳なさそうに尋ねる母親に、
「いいえ、とってもお利口さんですよ、よほど好きなんですね、黙ってじっと見てますよ」と皆が返してくれるのでした。
そしてウィンドウの中からも、職人さん達がにこにこと小さな見物人を迎えてくれるようになっ